



Fukuoka Prefectural University

福岡県立大学広報

Kendai

magazine 2018 秋号

no.25

Contents

理事長挨拶	P2
人間社会学部長・看護学部長あいさつ	P3
入学式／田川飛翔塾	P4
オープンキャンパス	P5
国際交流寮スタート／秋興祭	P6
国際交流／留学支援事業	P7
卒業生の近況報告／入試TOPICS	P8
サークル紹介	P9
教員研究紹介	P10
新規採用教職員紹介	P11
科学研究費・基金について	P12

GREETING

理事長・学長再任にあたりまして

理事長・学長
柴田 洋三郎



このたびの理事長・学長再任にあたり、改めて福岡県立大学のミッションを再確認し、「学生ファースト」の大学として教育・未来人材育成を最優先に、教職員のワークライフバランスの改善による研究・業務の質的向上をめざしつつ、それらの成果を基に社会貢献を推進していきたいと望んでいます。

6年前の赴任当初、公立大学法人という大学経営体制の要諦に不案内で、第2期中期目標期間に策定済みの盛り沢山の事業計画に戸惑い、全くの手探り状態でした。本年3月終了した6年間の実績報告を見ても、最初の2年は特記事項が4件と2件、しかも、文科省のプロジェクト事業採択や連携協定締結、大学憲章の制定など、外形的なものに限られています。それから次第に「体質改善」が進み、3年目から5件、6件、12件と徐々に教育環境整備を主にした特記項目が増え、最終の29年度は21件にも達したのは、まさに、本学の素晴らしい学生達、優れた教職員の皆様による日々の営為とご尽力の賜物だと、心より感謝申し上げます。

本年4月開始の第3期中期目標計画では、過去を教訓に、過度に硬直化した立案を避け、PDCAサイクルを回しながら恒常的点検評価による事業計画の進捗管理で内部質保証を徹底し、並行して中長期的なビジョンの策定を進めていく方針です。

急速なグローバル化や情報通信革新、産業構造の変革など社会の大変動期にあって、高等教育へは大きな期待が寄せられ、これまでの人類の歩み、狩猟採集社会、農耕社会、工業社会、情報社会の次に到来する、未来予測困難ないわゆる「Society 5.0」に向け、どのような資質をばぐみ人材育成を目指すべきかが問われています。学生が将来の如何なる社会変革にも柔軟に対応できる教育プログラムの開発、従来の文系理系の枠を越え「越境」・「深化」・「創造」を具現化する教育研究体制の整備が求められます。

とりわけ我が国では、少子化超高齢化社会を迎え、地域活性化における地方大学の役割が強く望まれています。内閣官房・まち・ひと・しごと創生本部中間報告では、地方大学には、地域を担う多様な人材の育成、地域の生産性向上、地方創生・生涯学習・リカレント教育への貢献、地域のシンクタンクなどなど、多彩な機能が期待されています。これに対し、国立86大学中55大学が「地域貢献」を主要ミッションに掲げる中、とりわけ地元自治体によって設立され地域に根ざし、いまや90を越える公立大学には、地域の公共財として使命を十全に果たすべく、今後より一層の独自性や個性の発揮が求められてきます。

その一方、大学は自主・自律の運営を基本とする学術機関であり、常に教育研究実質の主体的検証を進めていくことが本質的な責務でもあります。20世紀の大学の主要課題は、制度改革でしたが、これからのテーマは教育研究の質的転換です。制度ならトップダウンで改編が可能でしょうが、教育研究内容の改善は、構成員自らが主体となって自主的に進めねばなりません。

不易流行、世の流れに棹さしつつも、過去・現在・未来を展望した新たな知の探究に取り組むべく、各人の内発的な自助研鑽によって、不断の改革を希求していくことが求められます。福岡県立大学の個性・特色とは一体何か、皆さんと一緒にじっくり考え合っていきたいと思ひます。

川と芝生と食堂と

人間社会学部長に就任しました上野です。県大に通うこと25年になります。

駅から大学に向かうと白い鷺と蜻蛉のいる川があります。川では初夏の祭りに神事があり、学生も神輿を担いで参加します。

私の研究室は大学の外れです。窓からは小説で知った山が見えます。窓の下には図書館に向かう学生。バンドの練習音も聞こえてきます。

授業に向かうとラウンジでダンスの練習を目にします。校舎を出ると隣の小学校の子供達の声が聞こえます。

校舎を過ぎると生協食堂があります。本学の生協は学生達が作り上げたものです。学生達が本やパソコンを広げています。福祉士などの国家資格試験の勉強、幼稚園、保育園、中高教員、臨床心理士の実習の準備や報告書。中国、韓国、英国に留学する学生達は語学の勉強に懸命です。中国と韓国からの交換留学生もいます。彼らは日本語で会話をしています。

芝生の中庭を見ながら大講義室に着きます。「大」といっても200余名。これ以上は要りません。学生達は静かに受講します。本学の学生は素直で明るくきちんとしています。他大学を知る教員はみな彼らに驚きます。

本学部は短大時代を含めると50歳を越えます。しかし少人数教育のため、四大になってからの卒業生の総計は大きな私立大の一学年に及びません。しかし誠実な彼らは堅固な活躍をしており、昨年の公認心理士の準備も彼らの協力でスムーズにできました。

この小さい大学で豊富で濃厚な経験を得て卒業する貴重な学生達を、大事にするとはどういうことか、自問しながら毎日真摯に働きたいと思っています。



人間社会学部 学部長
上野 行良 教授

看護のプロフェッショナリズムとは何か



看護学部 学部長
尾形 由起子 教授

少子高齢社会の中で、国が目指す「社会の変遷に対応し、看護師として必要な能力を備えた質の高い人材養成」の検討と同時に、公立大学の使命である、地域における医療・介護の包括支援・将来構想への主体的参画が求められる中、先進的改革に取り組もうとしています。

本学部は昭和20年に創起され、平成15年に時代の流れに伴った形で発展的改組がされ、これまでも様々な取り組みをしてきました。

大学では、人々が将来にわたって健康で幸福な生活を実現するためには、学生の皆さんが「看護のプロフェッショナリズム」とは何かの問いを自らにかけ、ひとつでもその問いに答えられるようにするところではないかと考えています。

私は30年以上前に、「わたきりの状態になっても、住み慣れた家で暮らし続けることはできるのか」という問いをたてました。その問いは自らの仕事を常に振り返るものになっていたように思います。年月が経ち、その問いは現在国策となりましたが、今でも十分答えられません。しかし、日々学生の皆さんと共に教育の現場でその問いについて議論しています。

大学での学びの後、さまざまな現場で看護を実践し、病んでおられる人々への理解を深め、人々の問題を解決するために日々奔走していることと思います。この看護師さんに出会ってよかったと提供いただける人に成長してほしいと願っています。

さらに、保健・医療・福祉や生活にかかわるすべての人々と協働し、幅広く社会的な要請に応じた看護を展開できるよう教員も努力し、学びの場を拡げていきたいと考えています。

福岡県立大学 入学式

平成30年4月4日(水)、小川知事をはじめ多くの来賓の皆様のご臨席をいただき中で平成30年度の入学式が挙行され、学部学生268名、大学院生27名、計295名が入学しました。

柴田学長は告辞の中で、「この4年間に生涯の友を作り、先輩や後輩、先生方、さらには地域の方々との暖かな交流により、しなやかな心を持ったたくましい人に育ててください。そして、他人を気遣い、痛みを分かち合える暖かな心、現実を直視し適切に対応できる冷静な判断力、世のため人のために尽くす積極的な行動力、この3つを兼ね備えた人となるよう、希望します」と述べました。

福岡県知事、福岡県議会議長から御祝辞をいただいた後、学部入学生を代表して看護学部の渡邊麻衣子さんが、「知性を磨き教養を深め、将来の社会人としての基礎を養うことに努めます」と、大学院入学生を代表して人間社会学研究科の金子珠世さんが「一層勉学に努め、保健・医療・福祉の分野で貢献できる専門的職業人としての基礎を養うことに努めます」と宣誓しました。

締めくくりとして吹奏楽団の演奏により、新入生や会場の参列者全員で学歌を斉唱し、式を終了しました。



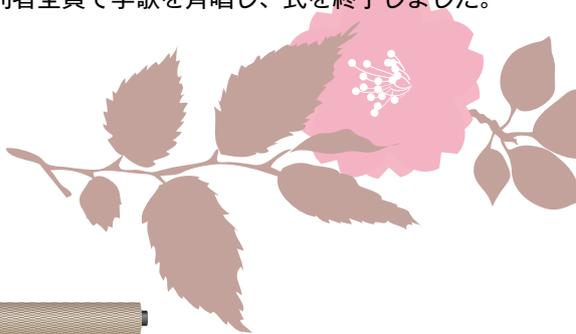
▲告辞を述べる柴田洋三郎学長



▲学部入学生代表 渡邊麻衣子さん



▲大学院入学生代表 金子珠世さん



田川飛翔塾

平成30年8月9日、田川地域1市6町1村の中学2年生32名が参加する「田川飛翔塾」の入塾式が本学で行われ、小川洋福岡県知事による訓話がありました。

田川飛翔塾とは、将来様々な分野でリーダーとして活躍する人材の育成を目的としたサマースクールです。参加する学生は4泊5日の合宿生活の中で、各界のリーダーによる講義や、田川地域全域から集められた学生同士のグループワークなど、学校教育では体験できない貴重な時間を過ごします。

今年度も本学から8名の学生が、生徒指導などを行うグループリーダーとして参加し、塾の運営に携わりました。

また、8月16日には柴田洋三郎学長による講義が本学で行われました。





▲英語解説

OPEN CAMPUS



▲在学生と話そうコーナー



▲看護学体験コーナー



▲キャンパスツアーコーナー

平成30年8月4日(土)に夏のオープンキャンパスを開催いたしました。今回のオープンキャンパスには炎天下にもかかわらず、1,589名の方に足を運んでいただきました。来場者は県内にとどまらず九州各県、全国各地から参加された方がおられました。

当日は、学長からのメッセージより始まり、各学科の説明会や本学の「小論文・英語」における入試対策のポイント解説、本学の在学生・教員と直接話すことができる「個別相談コーナー」、看護学・心理学を体験できる「体験コーナー」、在学生が本学の各種施設を案内する「キャンパスツアー」などのプログラムを実施しました。

来場者からは、「小論文(英語)解説が具体的で受験対策にとっても参考になった」「学科について詳しく知ることが出来た」「在校生に入試の体験談や普段の学校生活について話してもらい、大学生活がイメージできた」などのお声を頂くことが出来ました。

また、高大連携の一環として、オープンキャンパスと同時に開催したサマースクールでは、両学部で演習形式の講座を開き、多数の高校生に参加していただきました。

国際交流寮(男子学生寮)がスタート

本学初の男子学生寮となる国際交流寮が本年4月にオープンしました。

この寮は1ユニットに個室3室と共用のLDK、バス、トイレ、洗面台を完備し、留学生と日本人学生2名がルームシェアをして一緒に暮らしています。

ルームメイトと過ごす普段の学生生活の中で、日本人学生も留学生も多様な文化、価値観に触れ、語学力や国際感覚も磨けるこの寮は「寮内留学の場」となっています。韓国からの留学生のチャンさん、チェさん、イさんは「最初は日本人学生とうまくやっていたか正直すごく心配でしたが、一緒に住んでみたら、よく話をしてくれるし優しく接してくれて、すんなり馴染めました」、「考え方や文化の違いもあり、最初は理解できないこともあったが、2か月くらいで自然と理解できるようになりました」といった感想を話してくれ、寮生活に満足しているようでした。これからも、この寮が多くの学生の国際感覚を磨く場として活用されることが期待されます。



各部屋の留学生たち

国際交流

今年で秋興祭も27回目を迎えることとなりました。私たち実行委員は総勢136名という大所帯で活動しています。イベント部・会場設営部・設備管理部・渉外部・企画部・宣伝部の6つの場所に分かれ、今年4月から運営の準備を行ってきました。



11月17日(土)・18日(日)

第27回 秋興祭

第27回秋興祭実行委員長 平古場 美奈子

有難いことに、秋興祭実行委員会は地域の行事に参加させていただく機会がとても多いです。本大学は他県から受験してここ田川市に来た学生が多い中、様々な行事を通して田川市のことを知ることができるのは私たち委員会の一つの魅力だと思っています。

さて、第27回のテーマですが「繋～未来へ架ける伝承架」に決定致しました。大学祭が普段からお世話になっている地域の皆様方、県立大学生、ご来場くださるすべてのお客様の「繋」が場になればという思い、そして今年の秋興祭を彩るためにご協力いただく皆様への感謝の思いが込められています。また、実行委員の先輩方の熱い想いを引き継ぎ、昨年よりも進化した大学祭を、そして来年度以降もより良いものにしてほしい、この想いを後世へ受け継いでほしいという願いも込められています。

秋興祭当日、実行委員は秋興祭自体を楽しむ時間はほとんどありません。しかしそれ以上に秋興祭を無事成功に終えた時の喜びは計り知れません。ご来場くださる方々が「楽しかった、また来年も来たい!」と思ってくくださるよう、実行委員一丸となり準備に励んでいます。皆様のご来場、委員一同心からお待ちしております。

韓国文化研修

提携校である大邱韓医大学校(韓国)より韓国文化研修(Korean Culture Program)のお招きを受け、今年度も本学生2名が5日間の研修に参加しました。研修には8か国25校から学生が集まり、韓国語と韓国文化(茶道・伝統衣装・瞑想等)を共に体験・学習しました。様々な国の学生と交流したことで、本学の学生達が広く世界に目を向ける貴重な機会となりました。



派遣留学生だより 一韓国への留学から得たもの一

人間社会学部 社会福祉学科 4年 森田 希望

私は今でも韓国での生活を思い出す度に、留学して本当に良かったと感じます。一番良かったことは母国語以外の言語を話せるようになり、自信を持てるようになったことです。韓国語を不自由なく話せるようになるまでには時間がかかりましたが、その過程で自分の長所に改めて気づくことも出来ました。それは自分を変えられる、目標を成し遂げる力があるということでした。異国での生活は言葉の壁がつきもので、もともと話すことが好きな私にとって意思疎通が上手くいかないことはとてももどかしかったです。しかし現状を変えたいと思うほど努力することが出来ました。県大に通っていた時には想像出来ない程勉強に励み、自分の長所を認識することが出来ました。

また私は人を怒ることが苦手で、指導する立場に立つときストレスを抱えることが悩みでした。しかし、ある友人が私に「簡単に人を怒らないことは短所じゃなくて長所だ」と言ってくれました。私はこれまでの行動を肯定してもらえたような気がしました。このような会話も喋れるようになり、話を聞いてくれる友人ができたことも留学して良かったと思う理由です。

私は今春から韓国人留学生のチューターを務めています。私が韓国で親切にしてもらったように、今度は私が留学生のお世話をしたいと考えています。そして、たびたび思い出して嬉しくなるような思い出溢れる一年を送って欲しいです。



留学支援事業

福岡県立大学では留学生が福岡県の歴史や文化に親しむことができるよう、年間を通して留学生支援事業を行っています。事業では留学生と本学生がともに福岡県のような地域を訪問します。今年度第1回は田川市石炭・歴史博物館、ラピュタファーム、魚楽園を訪問しました。新緑の中、炭鉱の歴史と日本古来の庭園の造りについて学び、また地産地消の食文化を体験しました。第2回は飯塚友情ネットワーク様にご招待をいただき、飯塚市で開催された「留学生と市民のつどい」に参加しました。留学生達は地元有志の方々や他校の留学生と親しく交流し、国際的視野を広げる貴重な体験をすることができました。第3回は北九州・宗像方面へ向かい、福岡の夏を堪能しました。

ここからYouTubeの
動画ページに接続できます！

卒業生の近況報告

東峰村で地域おこし協力隊として働いています。

公共社会学科 卒業生 荒巻 悠太



初めまして、公共社会学科を卒業した荒巻悠太です。私は今、東峰村で地域おこし協力隊として働いています。

東峰村は人口約2000人程度の豊かな自然と伝統産業の残る小さな村です。

東峰村で働くきっかけとなったのは九州北部豪雨です。災害の発生した当日、私は卒業論文の調査の関係で東峰村を訪れていました。その時、災害の現場を目の当たりにし、私にできることはないかと思いボランティア活動に参加しました。しかし、ボランティアは一度しか行っておらず、東峰村のために何かできたという実感もありませんでした。そのため、東峰村の為に何かしたいという気持ちが強まり、継続的な活動として東峰村で働くことを決めました。実は、地域おこし協力隊の募集は平成30年の2月頃でその頃には教育関係の一般企業からの内定を頂いており、配属も決まっていた。企業の方には大変な迷惑をおかけしましたが、やはり東峰村で働きたいという気持ちが強かったためこの段階で辞退をさせて頂きました。

話は変わり、地域おこし協力隊というのは、人口減少等の激しい地域での地域力の維持・強化のために誘致された地域外の人材のことで、対象地域の地方自治体の嘱託職員として働くこととなります。私は、現在東峰村にあるケーブルテレビ（東峰テレビ）に出向する形で働いています。テレビ番組の編集や撮影に携わっています。また、YouTubeにも専用チャンネルを作り活動しています。動画の本数も少ないですがよろしければ見て頂けると幸いです。

まだまだ、村での生活になれず苦勞することも多いですが、また、何か役に立ちたいという思いでやってきましたが、まだ何も役には立てていないのが現状です。しかし、東峰村に対する強い気持ちを忘れずにこれからも頑張っていきたいと思っています。

最後に、東峰村はとても良い村です。美しい自然が広がっていますが、災害による被害の跡もいまだに残っています。より早い復興を目指すためにも皆様の協力が必要です。ぜひ、一度でもよいので村を訪ねてきてください。私で良ければ案内することも出来ます（笑）

よろしくお願い致します。



糸島高校の2年生が本学を訪問し 施設見学および特別模擬授業を受講しました

本学では入試広報活動として、先生が各高校にお伺いして入試等の説明を行う高校訪問や、複数の大学が集まる入試説明会などを行っていますが、今回は直接本学まで来ていただき各施設や教室を見学する本学訪問を紹介いたします。

写真は糸島高校の2年生が本学を訪問し、施設見学および特別模擬授業を受講した様子です。内容としては本学の説明会から始まり、寮や食堂などの各種施設案内や看護学部の先生によるミニ特別講義体験などを行いました。

参加した生徒は、大学進学のための夏休みの過ごし方や小論文試験対策にやっておくべきことなど、実際の大学の先生から聞くチャンスを逃さないよう真剣な様子でした。





和太鼓サークル カツドン

こんにちは！初めまして！今年発足しました「和太鼓サークルカツドン」です。え、なぜカツドン…？と思われる方！太鼓の音を思い出してみてください。音が「どんっ」縁が「かっ」となりませんか？そこから由来して名づけられました。決して食いしん坊の集まりではないですよ。全員違うとも言い切れませんが（笑）

私たちは週に一度視聴覚ホールで床や上達君（太鼓もどき）をたたき、素振りをして…曲を覚え、自分たちで作り…と活動しています。また月に一度糸田町のたぎり太鼓さんの太鼓をお借りして本物の太鼓を打って練習しています。

太鼓ってなんだか難しそう…と思う方も多いでしょう。ですが私たちはまず楽しむこと、リズムに乗ってバチを操り、体を動かすことを目的としています。メンバーの多くが初心者でバチの持ち方や打ち方から始めており、ペアを作って確認しあったりと和気あいあい楽しく活動中です!!今はまだ駆け出しのサークルなのでひっそりとは行っていますが、ゆくゆくは秋興祭（文化祭）などのイベントで演奏したいと考えています。また、少しずつお金をためて自分たちの太鼓を持つことも夢です。（太鼓は高いのでまだまだ先になりそうですが…泣）

最後に重大なお知らせです！最初にサークルと名乗りましたが、実はまだ発足して2年たっていないので正式なものではないのです…（笑）なので、まだまだ部員募集中です！見学だけでも待っています！

【部長】人間社会学部 社会福祉学科
柿本 亜優星



サークル紹介

フットサルサークル 英彦山 FC

こんにちは！わたしたち英彦山FCはプレーヤーとマネージャーを含め約60名で活動しています。県立大学の中では巨大なサークルの一つだと思います。活動時間は毎週金曜日の18時30分～22時まで、日曜日は10時30分～14時までで基本的に試合を中心に練習を行っています。フットサルと言うとまだまだ知名度も低くイメージの湧かない方も多いと思いますが、英彦山FCではサークルを掛け持ちしている人や、女子プレーヤーも多く、男女関係無く気軽に始めることのできるスポーツです。部員は初心者から経験者まで幅広く、いつも楽しく愉快地に練習しています。フットサルは学内での活動が主なのでトーナメントや大会に出ることはありません。なので、気軽に楽しむにはもってこいのサークルです。またフットサル以外での活動も多く、レクリエーションとして、別のスポーツをしたり、サークル全体で旅行などに行ったりして先輩や後輩関係無く皆が本当に仲がよいです。

県大でのサークル活動を楽しむなら英彦山FCに入るしかありません！経験者、サッカー、フットサルが好きな人、やってみたい人、興味を持った方は是非、体育館を覗いてみて下さい！マネージャーも大歓迎です。

【部長】人間社会学部 人間形成学科
中島 大介



地域で生活する子どもと家族の健康維持と支援について研究しています



看護学部臨床看護学系
准教授 田中 美樹

本格的な少子高齢化社会が到来し、核家族の増加や子ども数の減少、地域での家族間交流の希薄化など、子どもと家族を取り巻く環境は変化しています。『子どもは生物学的存在として生まれ、社会的存在として育つ』（小林登、1999）と言われています。子ども自身が「育つ力」を大いに発揮するため、家族のみならず、子どもを取り巻く大人や社会が、子どもを「育む力」を身に付ける必要があると考えています。そのため、子どもと家族の健康維持と支援および、子どもの健康を支える看護職や保育士に対するケア能力向上のための教育的支援に関する研究に取り組んでいます。

子どもと家族に対して

年3回幼稚園・保育園の年少、年中、年長クラスの子どもたちに「健康教育」を実施しています。基本的な生活習慣を身に付けていく時期の子どもたちに、手洗いや歯みがき、睡眠や食事など、日常生活で行っていることの意味や方法について、紙芝居やパネルシアターなど発達段階にあった方法で伝えています。また、年長クラスでは卒園前に「いのちの大切さ」を伝える、自分の命だけでなく、周囲の人の命を大切にすることを伝えています。さらに、保護者に対して、健康教育便りを出し、保護者の生活習慣が子どもに大きく影響することを伝えています。健康教育は、子どもが自分の体を意識し、健康に過ごすためのセルフケア能力を獲得すること、保護者が自身の生活習慣を見直し、子どもの育つ力を後押しする「育む力」を獲得することにつながっています。

看護職に対して

子どもの人口は減少しているにもかかわらず、小児科外来（以下、外来）では、一人当たりの受診回数は増加しています。外来は子どもにとって初めての医療機関で、そこでの経験が今後の医療体験に影響をおよぼす可能性が高いです。外来で処置を受ける子どもに対して、家族が励まし頑張りを認めることは、子どもが成功体験を得るための有効な手段であり、看護師はそれを家族に伝える必要があると考えています。しかし、外来での時間は限られており、家族に充分説明する時間確保が難しいという現実があります。そのため、外来看護師やスタッフとミーティングを行い、その内容を質的に分析した結果から、家族に子どもが受ける処置や子どもを認めることの大切さを伝えるためのツールを作成しました。そのツールは現在、全国の外来で使用していただいています。

保育士に対して

毎年、各市町村等の保育士会と協働し、子どもの事故予防、もしもの時の対応など、子どもの健康維持に関するテーマで、研修会を行っています。

現在、子どもの健康を支える看護職や幼稚園教諭・保育士のご協力を得ながら、子どもの健康維持と支援に関する取り組みや研究を継続しています。「子どもは社会の宝物」です。これらの活動をシステム化し、全ての子どもが元気に生活できるよう、さらに頑張っていきたいと思います。



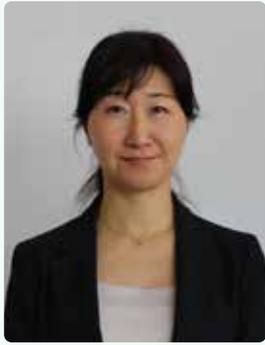
◀▲外来看護師・スタッフとの定期的なミーティングの様子と、家族に子どもが受ける処置や子どもを認めることの大切さを伝えるためのツール（一部）。



▲猛暑が来る前に、熱中症予防の「健康教育」を行っている様子。

新規採用教職員紹介

[H30.4.1付]



廣田 久美子

人間社会学部
社会福祉学科 准教授
社会保障法



鬼塚 香

人間社会学部
社会福祉学科 講師
精神保健福祉学、社会福祉学



福田 和美

看護学部
看護学科 教授
成人看護学



村田 和子

看護学部
看護学科 助教
成人看護学



大場 美緒

看護学部
看護学科 助手
成人看護学



藤九 亮輔

学務部 学生支援班
就職支援担当



和田 遼祐

学務部 教務入試班
入試・入試広報担当

お詫びと訂正

福岡県立大学広報 2018 春号の卒業式(P2)の記事において、誤った掲載がありましたので、下記のとおり訂正いたします。誤りがありましたことに対し、深くお詫び申し上げます。

[4段落目]

誤:「大学院修了生代表として看護学研究科の結田…」▶正:「大学院修了生代表として人間社会学研究科の結田…」

2018(平成30)年度

科学研究費助成事業交付決定一覧(平成30年7月1日現在)

〔人間社会学部〕

研究種目	氏名	研究課題名
基盤研究(B)	(教授) 細井 勇	児童の代替的ケアをめぐる国際比較研究—日本、韓国、イギリス、ドイツを中心に
	(准教授) 藤澤 健一	沖縄における教育指導者層の変容過程に関する研究—沖縄戦前後の人的構成に着目して
基盤研究(C)	(教授) 池田 孝博	主観評価と客観指標に基づく剣道に適した専用サーフェイスの検討と開発
	(教授) 田代 英美	平常化する地域社会の見えない避難—広域避難者にとって生活再建とは何か
	(教授) 福田 恭介	発達障害児における瞬目抑制・発生のタイミング
	(准教授) 奥村 賢一	不登校児童生徒の早期発見・未然防止に向けたスクリーニングシートの開発
	(准教授) 堤 圭史郎	生活困窮者自立支援に基づく排除と差別に抗する包摂=連帯型地域社会の可能性
	(准教授) 中村 晋介	大学生のITセキュリティに関する新たな教育プログラムの構築
	(准教授) 廣田久美子	発達障害者等に対する経済的自立のための就労支援の保障
	(准教授) 麦島 剛	ADHD動物の不注意脳波と不注意オベラント行動への環境調整と治療薬の有効性の原理
	(講師) 中原 雄一	大学生において体力は精神的健康度の予測因子となり得るか? : 4年間にわたる縦断研究
	若手研究(B)	(講師) 伊勢 慎
(講師) 河野 高志		地域包括ケアシステムにおける多職種連携の方法と効果に関する研究
(講師) 吉武 由彩		過疎地域における共助の論理の検討による包括的ボランティア論の構築に関する研究
若手研究	(講師) 坂無 淳	高等教育におけるジェンダー・バランスの不均衡とその是正に関する実証研究
	(講師) 寺島 正博	障害児者の「養護者による無意識の虐待」における従事者の支援モデルに関する研究
	(講師) 松岡 佐智	介護老人福祉施設における虐待予防に向けたセルフチェックシステムの開発
研究活動スタート支援	(講師) 阪井裕一郎	家族をこえる多面的なホームと共同生活に関する社会学的研究

〔看護学部〕

研究種目	氏名	研究課題名
基盤研究(C)	(教授) 石田智恵美	看護学生の知識の構造化を目指した演習・実習連携授業の開発
	(教授) 江上千代美	発達障害の診断前の児の親の養育レジリエンス向上-基本的生活習慣の習得を目指して-
	(教授) 尾形由起子	地域に密着した住民の主体的介護促進のための教育支援モデルの開発
	(准教授) 石村美由紀	行政が担う不妊専門相談センターを活用した不妊支援システムの構築
	(准教授) 椛 直美	認知症カフェにおける家族介護者の介護力獲得支援モデルの開発
	(准教授) 四戸 智昭	不登校・ひきこもりの子を抱える「支援困難な親」のためのセルフチェックリストの研究
	(准教授) 原田 直樹	不登校を防止する準不登校児童生徒への効果的な支援方法の検討に関する研究
	(准教授) 山下 清香	保健師の住民参加促進力量向上教育プログラムの開発
	(講師) 加藤 法子	経験知に基づいた吸引技術教育の検討
	(講師) 吉川 未桜	先天性心疾患の乳幼児・家族への包括的地域子育て支援に関する研究
若手研究(B)	(助教) 清水 夏子	看護基礎教育における東洋(漢方)医学教育の必要性の検討
	(助教) 楢橋 明子	在宅療養する神経難病患者を支えるインフォーマルサポートに関する基礎的研究
若手研究	(講師) 塩田 昇	継続的なトリプルP介入による睡眠の質、量の改善とメラトニン分泌・代謝に関する研究

〔その他〕

研究種目	氏名	研究課題名
基盤研究(C)	(名誉教授) 田中 哲也	エジプト高等教育のグローバル化における「外国大学」の教育社会学的研究

福岡県立大学基金のご案内

福岡県立大学では、学生生活、教育研究等の充実を図り、福祉社会に貢献できる人材を育成することを目的に基金を設置しています。寄附金は、学生支援、国際交流、教育研究活動等の実施に活用されますが、用途を指定することもできます。

皆様方からの格別のご協力とご支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

【ご寄附のお申込み方法】

「福岡県立大学」のホームページに詳細をご案内しておりますのでご確認ください。下記の連絡先にお問い合わせ願います。

【連絡先】

経営管理部総務財務班 TEL : 0947-42-2118

